

研 究

経験年数による食事場面における保育者の
食事指導意識の差異伊藤 優¹⁾, 七木田 敦²⁾

〔論文要旨〕

本研究では、保育者の経験年数によって、集団で食べる保育施設における食事場面での指導に対する意識が、どのように異なっているのかについて検討することを目的とし、質問紙調査を行った。その結果、新人保育者は保育施設の食事場면을食事のマナーや栄養などに関して教えたりすることを強く意識して、指導にあたっている一方で、ベテラン保育者は長期的・巨視的な視点で子どもたちの食行動を捉え、指導にあたっているのではないかと示唆された。さらに、中堅保育者はこのような子どもの食行動に対する捉え方の過渡期にあるのではないかと推察された。保育者間に生じる食事場面での指導に対する意識の違いを認識したうえで、子どもへの食事指導を行う必要があるだろう。

Key words : 食事場面, 経験年数, 保育者の指導, 保育施設, 保育者の意識

I. はじめに

幼児期は生涯にわたる食行動を形成する基盤となる時期として重要であり、それとともに保育所や幼稚園（以下、保育施設とする）でも食の楽しさを味わったり、いろいろな食材を知るといった「食育」活動が盛んに行われている。「食育」について、食育基本法では「生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきもの」と定義されている。その中でも、集団で食べる保育施設の食事場面は、子ども同士のモデリングの機会となったり¹⁾、多人数で食べることで子どもの食べる意欲を向上させたりする²⁾などの報告があり、「食育」に対する影響の大きさが示されている。さらに、食事場面での保育者の存在や指導が子どもの食行動に大きな影響を与えること³⁾が報告さ

れており、子どもにとって食事場面における保育者の指導が重要な意味を持つことが指摘されている。

その一方で、「食育」は上記のように定義されているものの、そこから解釈できることは多様であり、保育者によって目指す方向や取り得る方法が異なっているため、保育者間において明確な共通理解がなされていない。こうした保育者の食事指導についての先行研究は多く存在する⁴⁾が、それらの多くは保育者の食事指導に対する意識の違いについてまでは検討されていない。

入江⁵⁾は保育者と保育者養成校の学生との比較で、日々実践している保育者はより具体的な子どもの姿に即した食べ物の選び方・食べ方などを重視するなど、食事時の指導に関して独自の意識があることを報告している。この報告から、保育施設の実際の食事場面で

The Difference in the Childcare Teacher's Instruction Consciousness in the Lunchtime Scene
by Years of Experience

Yu ITO, Atushi NAKAKITA

1) 広島大学大学院教育学研究科 (大学院生)

2) 広島大学大学院教育学研究科 (研究職)

刷刷請求先: 伊藤 優 広島大学大学院教育学研究科 〒739-8524 広島県東広島市鏡山町1-1-1

Tel : 082-422-7111 Fax : 082-424-5261

[2504]

受付 13. 1. 21

採用 13.12. 2

は食事量や食事の早さ、アレルギーなど一人ひとりの子どもに応じた保育者の指導が求められており、それゆえに、実践の場で子どもの姿に接している保育者は、学生と比べより柔軟に子どもに指導するといった意識を持ちやすくなるといえる。そうであるならば、保育者間においても、経験年数の違いによって、同様に食事指導に対する意識が異なると考えられるのではないだろうか。つまり、保育者の経験年数に焦点をあてることで、食事指導に対する意識の差異のあり方を捉えることができると考えられる。

そこで、本研究では集団で食べる保育施設の食事場面において、保育者の経験年数の違いによって保育者の食事指導に対する意識がどのように異なるのかを検討することを目的とする。保育者の経験年数の違いが保育者間で食事指導に関して共通理解を持っていない原因になっているのではないかと考えられる。これらを検討することで、個々の保育者が「食育」に対して抱いている意識を可視化するとともに、保育者間に存在する「食育」に対する意識を差異化させている要因を検討していくうえでの示唆が得られるものとする。

Ⅱ. 対象と方法

1. 調査期間および調査対象

調査期間は、2011年5月中旬～6月下旬であった。研究参加への同意が得られた保育所（9園）および幼稚園（9園）に保育者の食事指導に対する意識についての質問紙を郵送し、各園に勤務する年少児から年長児までの子どもの食事場面で指導をしたことがある保育士（72名）および幼稚園教諭（90名）に対し、配布した。なお、匿名での記述を求め、個々の対象者が回答した質問紙は厳封したうえで収集することによって、保育者の提出状況、回答などが他者に知られないよう配慮した。有効回答率は88.5%であった。

なお、本研究では、保育所に勤務する保育士と幼稚園に勤務する幼稚園教諭を保育者と表現し、分析の対象とした。これは、食育基本法や食育推進基本計画などにおいて、保育所・幼稚園の隔てなく幼児期の「食育」を担う場としての重要性が述べられている点や、幼保一元化の流れとともに、保育園児・幼稚園児区別なく食事を行う認定こども園が拡大している点を考慮したためである。また、保育所・幼稚園の食事場面のどちらも家庭の保護者以外で子どもに指導性を持ってかわる大人とともに集団で食事を行っている。そのため、

保育者が求められる食事指導の内容や課題には共通性も多いと考えられ、横断的に捉えることができる。したがって、本研究では保育所・幼稚園などの保育施設の食事場면을研究対象とする。

2. 調査項目

調査項目は、以下のとおりである。まず、(1) 食事場面における指導保育者数と保育者間での食事場面についての話し合い状況について質問した。次に、(2) 経験年数別にみた保育者の食事指導意識について質問した。具体的には、①食に関する研修への参加率と受講したい研修内容、②食事場面の指導に対する困難さ（食事場面の指導に対して困難に感じる保育者の数と困難さの内容）について質問した。さらに、保護者や保育者の指導を行動観察により明らかにした先行研究^{6,7)}および調査者の予備観察において、保育者の指導で言及されることが多かった子どもの食行動を25項目設定し、その中で③保育者が身につけさせたい食行動や保育者が指導する際困難に感じている食行動について質問した。

なお、先行研究^{8,9)}から、対象者を経験年数によって1～4年を新人保育者（38名）、5～10年を中堅保育者（58名）、11年以上をベテラン保育者（66名）に分類して分析を行った。

3. 分析の方法

新人保育者、中堅保育者、ベテラン保育者によって、研修希望や指導する際に困難さを感じる人数に差が生じるかを明らかにする際には χ^2 検定を用い、検討した。そして、差が生じた場合、新人保育者、中堅保育者、ベテラン保育者のどの経験年数において差が生じているのかを残差分析により明らかにした。各セルの度数に3以下の数値を有している際はFisherの直説法を行った。

経験年数によって身につけさせたい、または困難に感じている子どもの食行動数に差が生じているのかを検討する際には、新人保育者、中堅保育者、ベテラン保育者を独立変数に、身につけさせたい、または困難に感じている子どもの食行動数を従属変数とし、一元配置分散分析を用い、経験年数の違いによる差を検討した。

検定においては、 $p < .05$ を有意差ありと判断した。なお、本論文での表中において、全体に比べて有意に

表1 経験年数別受講したい研修内容

(実数は人数)

研修内容	受講希望の有無	全体 n=162	新人 n=38	中堅 n=58	ベテラン n=66	χ^2 検定
食事場面での指導方法	受講希望あり	108	30	44	34▽	**
	受講希望なし	54	8	14	32▲	
子どもの発達段階と食行動についての知識	受講希望あり	99	22	39	38	ns
	受講希望なし	63	16	19	28	
家庭との連携方法	受講希望あり	77	18	30	29	ns
	受講希望なし	85	20	28	37	
近年の子どもの食をめぐる実態	受講希望あり	58	8▽	20	30▲	*
	受講希望なし	104	30▲	38	36▽	
栄養・食品・衛生など健康と食についての知識	受講希望あり	38	7	14	17	ns
	受講希望なし	124	31	44	49	
地域の食文化について	受講希望あり	15	1	2	12▲	**
	受講希望なし	147	37	56	54▽	
食品群・献立の考え方	受講希望あり	10	2	3	5	ns
	受講希望なし	152	36	55	61	
その他	受講希望あり	2	0	0	2	ns
	受講希望なし	160	38	58	64	

** $p<.01$ * $p<.05$

高かったものについては▲, 全体と比べて有意に低かったものは▽として示す。

Ⅲ. 結 果

1. 食事場面における指導保育者数と保育者間での食事場面についての話し合い状況

本調査対象者に「幼児以上のクラスの食事場面で食事指導をする際、自分以外の保育者と一緒に指導にあたっていますか」という質問に対し、全体の76.8%の保育者が一人ではなく、複数名の保育者で食事指導を行っていると回答した。

次に、「カンファレンスで食事場面の話題を取り上げたことがありますか」という質問に対し、全体の81.5%の保育者がカンファレンスで食事場面の話題を取り上げたことがあると回答した。また、食事場面での子どもへの指導について他の保育者に相談したことがある保育者は全体の84.6%であった。つまり、全体の8割以上の保育者が、食事場面における子どもの指導に対して関心を抱き、他の保育者と話し合いの機会を設けていることが示唆された。

2. 経験年数別にみた保育者の食事指導意識

①食に関する研修への参加率と受講したい研修内容

「食に関する研修を今後受講したいと思いますか」という問いに対して、新人保育者の97.2%, 中堅保育

者の96.6%, ベテラン保育者の90.6%が食に関する研修を受講したいと考えており、経験年数によって有意な差は認められなかった。しかし、「具体的にどのような内容の研修を受講したいですか」という質問項目について、ベテラン保育者は、新人保育者や中堅保育者よりも「食事場面での指導方法」に関する研修を受講したいと考えている者が有意に少なかった($\chi^2(2) = 11.60, p < .01$)。一方で、新人保育者や中堅保育者と比べ、ベテラン保育者は「近年の子どもの食をめぐる実態」($\chi^2(2) = 6.32, p < .05$)や「地域の食文化について」($\chi^2(2) = 10.57, p < .01$)の研修においては、有意に受講したいと考えている者が多かった。つまり、ベテラン保育者は新人保育者や中堅保育者と比べ、食事場面での実践的な指導方法よりも子どもの食の背景となる情報を研修において把握したいと考えていることが明らかとなった。

以上のことから、保育者は経験年数に関係なく食に関する研修を「受講したい」と考えていても、経験年数によって受講したい研修内容は異なっていることが示された(表1)。

②食事場面の指導に対する困難さ

「食事場面での指導を困難に感じていますか」という質問項目に対して、新人保育者の91.4%, 中堅保育者の85.7%, ベテラン保育者の87.3%が食事場面での指導を困難に感じているとの結果が示され、経験年数

表 2 経験年数別にみた食事場面における指導の困難性

(実数は人数)

困難さの具体的な内容	指導の困難性の有無	全体 n=162	新人 n=38	中堅 n=58	ベテラン n=66	χ^2 検定
たくさん子どもたちを一度に見ないといけない	困難性あり	44	16▲	15	13	*
	困難性なし	118	22▽	43	53	
時間に制約がある	困難性あり	35	12	13	10	ns
	困難性なし	127	26	45	56	
子どもが言うことを聞かない	困難性あり	22	11▲	7	4▽	**
	困難性なし	140	27▽	51	62▲	
教えることがたくさんある	困難性あり	20	3	7	10	ns
	困難性なし	142	35	51	56	
保護者との意見の食い違い	困難性あり	19	2	5	12	ns
	困難性なし	143	36	53	54	
その他	困難性あり	58	9	24	25	ns
	困難性なし	104	29	34	41	

** $p<.01$ * $p<.05$

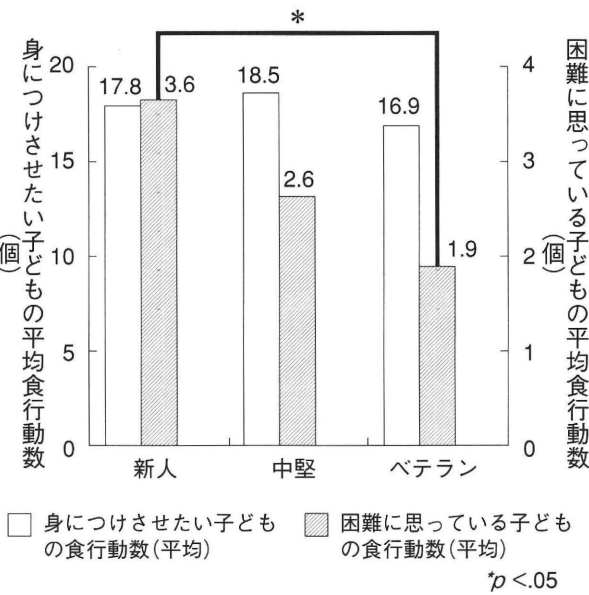


図 保育者が身に付けさせたい子どもの食行動と食事指導の際困難に感じている子どもの食行動の平均項目数

③指導時に保育者が子どもに身につけさせたい食行動および困難に感じている食行動

まず、25項目の子どもの食行動について、保育者が子どもに身につけさせたいと考える項目数については、経験年数による有意差は認められなかった(図)。一方で、保育者が指導する際、困難に感じる食行動数に関しては、新人保育者の方がベテラン保育者より有意に多くの項目に関して課題を感じていた(図 $F(2) = 5.61, p < .05$)。また、項目別の比較では、「食卓を離れて立ち歩かない」($\chi^2(2) = 12.52, p < .01$)、「前を向いて食べる」($\chi^2(2) = 9.00, p < .05$)、「食べこぼしをしない」($\chi^2(2) = 12.14, p < .01$)、「食べ物で遊ばない」($\chi^2(2) = 14.15, p < .01$)、「口に食べ物を入れたまま話をしない」($\chi^2(2) = 8.64, p < .05$)、「衛生面に気をつける」($\chi^2(2) = 12.70, p < .01$)という、主にマナーや行動規律に関する6項目において、新人保育者の方がベテラン保育者よりも、有意に困難だと感じていた(表3)。

IV. 考 察

以上のことから、25項目の食行動に関しては、身に付けさせたい項目数は経験年数によって変わらないことが示された。他方、子どもの具体的な食行動に対する指導の困難さをみると、経験年数の少ない新人保育者ほど「食卓を離れて立ち歩かない」や「食べこぼしをしない」などのマナーや行動規律に関する子どもの食行動に対して困難に感じていることが明らかとなった。つまり、新人保育者は、食事場面において子ども

表3 食事場面における子どもの食行動に対する指導の困難性

(実数は人数)

子どもの食行動 (25項目)	指導の困難性の有無	全体 n=162	新人 n=38	中堅 n=58	ベテラン n=66	χ^2 検定
嫌いなものでも食べる	困難性あり	53	13	22	18	ns
	困難性なし	109	25	36	48	
残さず食べる	困難性あり	40	13	17	10	ns
	困難性なし	122	25	41	56	
時間内に食べる	困難性あり	39	11	13	15	ns
	困難性なし	123	27	45	51	
遊ばずに食べる	困難性あり	30	11	11	8	ns
	困難性なし	132	27	47	58	
正しい食具の持ち方ができる	困難性あり	29	7	10	12	ns
	困難性なし	133	31	48	54	
姿勢を正して食べる	困難性あり	27	9	10	8	ns
	困難性なし	135	29	48	58	
三角食べができる	困難性あり	24	4	9	11	ns
	困難性なし	138	34	49	55	
食卓を離れて立ち歩かない	困難性あり	24	12▲	8	4▽	**
	困難性なし	138	26▽	50	62▲	
前を向いて食べる	困難性あり	18	9▲	6	3▽	*
	困難性なし	144	29▽	52	63▲	
よくかんで食べる	困難性あり	18	2	8	8	ns
	困難性なし	144	36	50	58	
食べこぼしをしない	困難性あり	18	10▲	5	3▽	**
	困難性なし	144	28▽	53	63▲	
食べ物で遊ばない	困難性あり	15	9▲	5	1▽	**
	困難性なし	147	29▽	53	65▲	
食べさせてもらわないで食べる	困難性あり	14	4	8	2	ns
	困難性なし	148	34	50	64	
ひじをついて食べない	困難性あり	13	3	5	5	ns
	困難性なし	149	35	53	61	
適切な食事量を知る	困難性あり	12	4	3	5	ns
	困難性なし	150	34	55	61	
一度に口に詰め込まない	困難性あり	10	4	3	3	ns
	困難性なし	152	34	55	63	
口に食べ物を入れたまま話をしない	困難性あり	10	6▲	3	1▽	*
	困難性なし	152	32▽	55	65▲	
衛生面に気をつける	困難性あり	6	5▲	1	0▽	**
	困難性なし	156	33▽	57	66▲	
誰とでも一緒に食べられる	困難性あり	3	0	2	1	ns
	困難性なし	159	38	56	65	
食材についての知識を持つ	困難性あり	2	0	0	2	ns
	困難性なし	160	38	58	64	
食事の意義について理解を深める	困難性あり	2	1	0	1	ns
	困難性なし	160	37	58	65	
会話を楽しみながら食事をする	困難性あり	2	0	1	1	ns
	困難性なし	160	38	57	65	
食べる時に音を立てない	困難性あり	1	0	0	1	ns
	困難性なし	161	38	58	65	
「いただきます」などのあいさつをする	困難性あり	1	0	1	0	ns
	困難性なし	161	38	57	66	
行事食に関心を持つ	困難性あり	1	1	0	0	ns
	困難性なし	161	37	58	66	

** $p<.01$ * $p<.05$

たちにマナーや行動規律などを習得させることに重点をおいていると考えられ、ベテラン保育者と比べ新人保育者が、集団から逸脱した子どもや指示を守らない子どもの行動を過大視する場合があると推察される。このことから、新人保育者は保育施設において子どもにマナーや行動規律に関する食行動を習得させることが保育者の義務と捉え、食事指導を行っているのではないかと考えられる。

他方、ベテラン保育者は新人・中堅保育者と同様に、食事場面での指導に対して難しさを感じているものの、新人保育者と比べ子どもの具体的な食行動に対する指導に困難を感じることは少なかった。これは、ベテラン保育者が経験を経るにつれ、具体的な子どもの食行動に対して多様な対処方法を習得していることが理由の一つとして考えられる。また、先述した経験年数別にみた研修の参加希望内容の結果において、ベテラン保育者は実践的な指導方法よりも子どもの食の背景となる情報を研修において把握したいと考えていたこととも合わせて考えると、指導方法の向上だけでなく、ベテラン保育者と新人保育者の子どもの食事指導に対する意識の異なりも要因として挙げられるのではないかと推察される。

つまり、新人保育者は食事場면을子どもたちにマナーや行動規律などを教える場として捉えているのに対し、ベテラン保育者は食事場면을保育活動や子どもの生活の一場面として捉えており、保育施設の食事場面において、子どもの食行動に対してその場での指導が必要であるという意識が薄いのではないかと考えられる。食事は、食事内容に対する嗜好や食事をする早さなど、保育者が指導してもすぐには習得できない個人的な行為である。このような食事場面において、多くの子どもと接し、さまざまな状況を経験したベテラン保育者は、子どもに細かい食行動をすべて教えるのではなく、自身の経験上重要だと考える指導内容を選別し、教えているのではないかと推察される。それゆえ、ベテラン保育者は経験から保育者の指導の限界性や子どもの習得程度などを理解したうえで、巨視的な視点で子どもたちの食行動を捉えているのではないかと推察される。

本研究における対象者の多くは、カンファレンスで食事場面の話題を取り上げたり、食事場面の指導について他の保育者に相談したりしていた。食事場面は、一人の保育者が子どもたち全員に対応するのでは

なく、複数の保育者で子どもたちに対応する場合が多い。そのため、保育者間で経験年数による食事場面での指導に対する意識の違いがあることを理解しておかないと、相互に話し合う機会があったとしても、保育者間での混乱や隔たりが生じてしまう要因ともなるだろう。

「食育」の定義が広義であるからこそ、食事場面で保育者が指導する際にも保育者間で意識の違いが生じてしまう。食事は食べる量やスピードなど個人差が特に顕著に顕れる行為であり、だからこそ、子ども一人ひとりに即した指導が必要となる。そのため、保育者間で食事指導に対する意識の違いを理解したうえで意見を交換し合うことが、より多角的な視点から子どもの食事指導を行うことにつながるのではないかと考えられる。

V. ま と め

本研究では、集団で食べる保育施設の食事場面での指導について、経験年数の違いによって保育者の指導に対する意識がどのように異なるのか検討することを目的として調査を行った。

その結果、保育者は経験年数によって、食事場面での指導に対する困難性の具体的な内容や受講したい研修内容が異なっていることが明らかとなった。新人保育者は保育施設の食事場면을食事のマナーや栄養に関することなどを教える場として強く意識し、指導にあたっている。一方で、ベテラン保育者は食事場면을生活の一場面として涵養と捉え、子どもの食の背景となる要素も取り入れつつ、巨視的な視点で指導にあたっているのではないかと考えられた。さらに、中堅保育者はこのような食事指導に関する意識の過渡期にあるのではないかと推察できる。

今後は、本研究の結果が本研究の対象者独自の特徴ではなく、経験年数による変化として捉えるためにも、中堅保育者の食事指導に関する意識の変容過程に焦点をあてるが必要となってくるであろう。

謝 辞

ご多忙のところ、本研究に快くご協力下さいました、保育所、幼稚園の先生方に心よりお礼を申し上げます。

なお、本研究は第59回日本小児保健協会学術集会（2012年9月）において発表した内容を再検討し、加筆修正を行ったものである。

文 献

- 1) Hendy H M. Effectiveness of trained peer models to encourage food acceptance in preschool children. *Appetite* 2002 ; 39 : 217-225.
- 2) Lumeng J C, Hillman K H. Eating in larger groups increases food consumption. *Archives of Disease in Childhood* 2007 ; 92 : 384-387.
- 3) Wardle J, Herrera M L, Coole L, et al. Modifying children's food preferences : the effects of exposure and reward on acceptance of an unfamiliar vegetable. *European Journal of Clinical Nutrition* 2003 ; 57 : 341-348.
- 4) Hendy H M. Comparison of five teacher actions to encourage children's new food acceptance. *Annals of Behavioral Medicine* 1999 ; 21 : 20-26.
- 5) 入江慶太. 保育士養成校学生の食にかかわる意識調査—保育者との比較を通して—. 川崎医療短期大学紀要 2008 ; 28 : 71-75.
- 6) 外山紀子, 無藤 隆. 食事場面における幼児と母親の相互交渉. *教育心理学研究* 1990 ; 38 : 395-404.
- 7) 中澤 潤, 鍛冶礼子, 石井恭子. 幼稚園教師の食事場面における援助の分析—子どもの発達と教師の保育観—. *保育学研究* 1995 ; 33 (1) : 59-67.
- 8) 高濱裕子. 保育者としての成長プロセス—幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達—. 東京 : 風間書房, 2001.
- 9) 上村眞生, 七木田 敦. 保育士のサポート源構造に関する実証的研究. *小児保健研究* 2008 ; 67 (6) : 854-860.

〔Summary〕

In this research, the consciousness of instruction in the lunchtime scene eaten in a group in childcare facilities was conducted in the form of questionnaire for the purpose of examining in what way the said consciousness differed depending on the childcare teachers' years of experience. As it turned out, the new childcare teachers were strongly conscious of giving instructions on dining manners, nutrition, etc. in the lunchtime scene of childcare facilities. On the other hand, it was suggested that the veteran childcare teachers may have captured the entire picture of children's eating behavior from longer-term/broader viewpoints in guiding the children. Furthermore, it was presumed that mid-career childcare teachers were in a transitional stage for the development of their own perception of children's eating behavior. Consequently, it will be necessary to provide dietary instructions for children with definite recognition of the differences in the consciousness of instruction in the lunchtime scene thus examined among childcare teachers.

〔Key words〕

lunchtime scene, years of experience,
childcare teacher's instruction, preschool,
childcare teacher's consciousness